

「死にたい夜に朝陽はずいぶん まぶしい」

最近はその思うことが増えました。

次こそ、と思う自分をどうにか抑える為に劇場を抑えては公演を打ち続けていました。

「次にやらなくちゃいけないことがある」と考えれば、まだ死なないでいられるから。いつか死んでしまおう、今回は僕の遺作だ、なんて思い続けながら深夜に執筆を続けて、しかし気が付けば朝陽が昇るのです。

明けない夜はないと言いますが、夜が明けて欲しくない人間が一定数存在していることをどうか知って欲しい。

そういった人たちのことを、認めなくても良いから、あまり真っ向から否定しないであげてください。正論や真っ当な言葉の方が合っていて、自分たちの方が異質なことなんて、とうの昔に分かっているのですから。

今作『遠く吠えて花火をあげる』はそういった弱い人々の逃避行なのかもしれない。

「自殺志願者を集めたシェアハウスを描いてみたい」という思い付きにも等しい気持ちから生まれた脚本です。

しかしどうにも、あまり暗いものになってしまうのは“私は今辛いんです！”を伝えるだけの作品になってしまう。ほら、号泣している人を見ると冷静になっちゃう現象ってあるじゃないですか？ それはちょっと、違うなあと思うのです。

なので、世界で一番明るい逃避行を描いてみようと思います。

劇場にお越し下さるあなたへ。

今作を観て、どのような感想を抱いてくださっても結構です。

演劇は観ても観なくても平気といえば平気なのですから。

私たちは、観てくれたあなたが少しでも“あした”を前向きに生きられるような作品を精一杯、届けてみようと思います。

劇場で過ごした2時間が大切な何かになりますように。(もう少し短くなるかもだけど…)

どうぞよろしく申し上げます。

脚本・演出／桐山瑛裕 (SUPERNOVA)